

『今月の天候と農作業』

通巻第5703号
9月号
令和7年9月6日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【特に注意を要する事項】

期間の前半は気温がかなり高くなる見込みです。

【予報のポイント】

暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。期間の前半は気温がかなり高くなる見込みです。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	10	10	80
降水量	九州南部	40	30	30
日照時間	九州南部	30	30	40

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。平均気温は、高い確率80%です。

＜1 週目の予報＞ 9月6日(土)～ 9月12日(金)

湿った空気の影響で雲が広がりやすいでしょう。

＜2 週目の予報＞ 9月13(土)～ 9月19日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

＜3 週目から 4 週目の予報＞ 9月20日(土)～ 10月3日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、週間天気予報

(<https://www.jma.go.jp/bosai/forecast/>)を参照してください。

普通作物

◆普通期水稻

1 水管理

根の活力を維持し、登熟歩合を高めるために、収穫の5日前まで間断かん水が続けましょう。特に高温時には飽水管理や夜間の通水が有効です。

なお、台風接近時には深水にして倒伏軽減を図り、台風通過後は湛水管理を行いましょう。

2 病虫害防除

穂いもちや紋枯病、トビイロウンカの発生に注意します。トビイロウンカは、穂揃期とその7～10日後の2回カメムシ類と一緒に防除を必ず実施しましょう。また、ほ場をよく観察し、発生が多い場合には、臨機防除を行います。

3 収穫

収穫適期の目安は籾全体の約8割が黄化した頃です。籾の高温での急激な乾燥は、食味や品質が低下するので避けましょう。玄米水分は仕上げ水分14.6～15.0%を目標に乾燥を行います。

◆大豆

湿害防止のため、ほ場周囲や畦間の排水溝を整備します。開花期以降は紫斑病やカメムシ類の防除を行います。ハスモンヨトウは老齢幼虫になると薬剤の防除効果が低下するため、定期的にはほ場を観察し、早めに防除を行いましょう。

◆そば

1 排水対策

そばは湿害に弱く、長時間に渡り滞水や冠水をすると生育不良や立枯れが発生します。排水溝を設けるとともに、生育期間中も排水を徹底しましょう。

(福川 泰陽)

施設野菜

◆施設野菜全般

施設野菜ではきゅうり、ピーマン、トマト、いちごなどの定植が始まります。台風や降雨の多い時期となるため、定植準備は計画的に余裕をもって行いましょう。

定植は適期に行い、早く活着させることが最も重要です。日射が強く、高温であるため、定植後は遮光資材等を活用するとともに、過不足に注意したこまめな灌水管理を行いましょう。

◆きゅうり

定植後から収穫開始期までの管理で草姿が決まります。根を十分に張らせ、徒長しない草姿に仕上げるのが、収量・品質向上につながります。定植後は株元へ重点的に手かん水を行い、活着後はかん水を控えて、草勢を調節しましょう。

◆ピーマン

接ぎ木栽培のピーマンは、自根栽培に比べて草勢がやや弱くなる傾向があります。台木の特徴を把握して、定植後から収穫開始時期までかん水量を2、3割増やすなどして草勢を強めに管理しましょう。

◆トマト

促成栽培の大玉トマト、ミニトマトの定植期となります。セル苗を2次育苗せずに直接定植する場合は、異常茎（メガネ茎）の発生を抑えるため、定植後のかん水量を制限しますが、極端なかん水制限は初期生育に悪影響を及ぼすため、少量ずつ多回数のかん水をするようにしましょう。

◆いちご

ポット苗の花芽分化期となります。葉柄中の窒素濃度と併せて、9月10日頃の2、3日前から花芽検鏡を行い、花芽が分化していることを確認して、9月中旬以降に定植します。

（境田 耕作）

葉茎根菜類・いも類

◆秋冬野菜の播種・定植

9月は、だいこんやキャベツ等の播種・定植期です。土壌が乾燥している場合は、播種・定植の前後にかん水を行います。また、雨後、ほ場に雨水が溜まる場合は、排水状況を確認し、排水性を改善しましょう。

生育初期に病害虫や雑草が発生すると、減収の原因となるため、病害虫の防除を徹底します。

◆にんじん

播種後の大雨で欠株が多くなった場合の播き直しは、9月20日頃までを目安とします。

◆だいこん

播種は9月上旬から下旬に行います。10月中旬以降に播種する場合はマルチ栽培とします。

また、ホウ素が欠乏すると黒芯が発生しやすくなるため、不足する場合は、基肥にホウ素入り肥料を施用しましょう。

◆ほうれんそう

播種は9月下旬から始まります。播種前にはほ場の排水状況を確認しましょう。また、土壌診断を行い、pHが低い場合は、pH6.5前後を目標に石灰資材を施用します。

◆さといも・かんしょ等の収穫後の片付け

収穫残さは翌年作の病害の発生源になります。収穫終了後は、収穫残さをほ場外に持ち出しましょう。持ち出せない場合は、地温ができるだけ高いうちに、耕うん等により、残さの分解を促します。

(倉永 泰代)

果樹

I 常緑果樹

◆温州みかん

極早生温州みかんの収穫が始まります。収穫は着色や糖度などの出荷基準に基づいて行います。また、カメムシ類の飛来が見られる時期です。園地を観察し、早期発見・早期防除に努めます。特に台風通過後には注意しましょう。

マルチ栽培や根域制限栽培の園地では、近年、樹勢の低下が目立ちます。収穫後は速やかにマルチ除去や戻しかん水、窒素主体の施肥・葉面散布を行い樹勢の回復に努めましょう。

◆完熟きんかん

9月に入ったら極小果、2果なりを中心に摘果を行います。果実の肥大促進のためにも、9月末までに摘果を終了しましょう。

結果の時期が7月中旬以降の園地や夜温が早く低下する中山間地域では、果実の肥大促進の為に秋期の夜温確保が重要です。10月中旬のビニル被覆に向け準備を進めましょう。

◆マンゴー

後期出荷の作型では、剪定直後からたっぷりとかん水を行い、高温管理と葉面散布により新梢の発生や伸長を促進しましょう。

9月になると、日射量は真夏よりも大幅に少なくなります。内カーテンや遮光カーテンを全て開放し、十分な日照を確保しましょう。

2 落葉果樹

◆くり

ほとんどの品種が収穫時期を迎えます。収穫は毎日、気温の低い早朝に行うことで、果実温度を低く保ち鮮度を保持します。出荷前の選別を徹底し、害虫による被害果等の混入を防ぎましょう。

3 台風対策

防風ネットの点検や、冠水対策としての排水溝の整備を行きましょう。

かんきつ類のかいよう病対策である銅剤の散布は、台風襲来前に行うことで高い効果が期待できます。

(黒木 宏憲)

花き

◆夏秋ギク

強日射により、成長点付近の葉焼けの発生リスクが高まるため、遮光や換気、葉面散布、かん水等の対策を遅滞なく実施します。

9月出荷の作型では、多肥や高温により奇形花が発生しやすくなるため、適正な施肥、遮光や換気等を積極的行いましょう。

◆秋ギク

作型ごとに、育苗、冷蔵、定植などの作業を計画的に進めます。

なお、穂の冷蔵時の温度は2～4℃とし、冷蔵期間は開花遅延を防止するために3週間を限度とします。

また、摘心・採穂時にベンジルアミノプリン液剤を適宜茎葉散布し、高温時の穂の安定確保に務めます。

◆ホオズキ

土壌伝染性病害の対策として、出荷終了後に残さの分解処理を実施します。なお、残さの分解を促すためには、カーバムナトリウム塩液剤や微生物資材の利用が効果的です。

また、次作に実生苗由来の地下茎を利用する場合は、発芽揃いを良くするために、9月下旬までに播種を行いましょう。

◆スイートピー

催芽処理・種子冷蔵の実施時期です。

充実した大きい種子を選び、流水中で吸水処理を行います。また、事前に冷蔵庫の庫内温度が適切であることを確認してください。

ほ場の準備として、定植の数日前から遮光やかん水を行い、ハウス内温度や地温をあらかじめ下げるようにしましょう。

◆デルフィニウム

中山間地は定植時期です。高温による早期抽だい防止のために、ハウス内の換気や遮光を行いましょう。

◆キイチゴ

弱枝や不良枝の整理時期です。樹勢維持のために充実したシュートを3、4本程度残しながら、数回に分けて作業を実施します。

また、乾燥ストレスを軽減して萌芽を促進するために、必要に応じて通路かん水を行いましょう。

(山塚 裕美)

畜産

◆家畜防疫対策

8月26日時点において、宮崎県内では11例の豚熱（CSF）に感染した野生イノシシが確認されており、養豚場へのウイルス侵入リスクが高い状況が続いています。

また、アジア圏ではアフリカ豚熱（ASF）、鳥インフルエンザの発生も引き続き確認されています。これらの法定伝染病から農場を守るため、畜舎内外の消毒はもとより、人・車両・物資の消毒と野生動物の侵入防止対策を行い、農場にウイルスを侵入させないように飼養衛生管理基準に基づく侵入防止対策の徹底を図りましょう。

◆家畜

受胎成績の低下等、暑熱による影響が出てくる時期です。環境と飼養管理の両面から対策をとり、家畜の体力の回復を図るようにしましょう。昼間は畜舎への風の通りを良くするとともに、換気扇や細霧装置を動かす等の暑熱対策を行いますが、夜間は急に気温が下がることがあるため、気温差で家畜が体調を崩さないように温度管理に気をつけましょう。

また、台風の襲来も予想されるため、畜舎の補修や飼料の確保など事前に対策を行いましょう。

◆飼料作物

台風の襲来により収穫が出来ないことが想定される場合は、天候に注意しながら早めに収穫するなど、良質な粗飼料の確保につとめましょう。また、極早生イタリアンや極早生エンバクの作付け時期でもありますので、計画的な作業を行いましょう。

(小田 弥生)

特用作物

◆茶

これからの管理作業は、翌年の一番茶の収量と品質確保のために大変重要です。こまめに茶園を巡回し、作業遅れとならないよう適期に適切な管理を行いましょう。

1 秋肥の施用と土づくり

秋肥の施用時期が遅れると耐寒性が低下し、秋冬期の急激な最低気温の低下により寒害(幹割れ・冬芽の凍害等)を受けやすくなるため、中山間地域や寒害を受けやすい品種、幼木園では9月上旬までに、それ以外は9月中旬までに、土壌診断の結果を考慮し地域の施肥基準に準じて秋肥を施用しましょう。また、土壌が固く根量が少ない茶園では、9月上旬までに10a当たり堆肥1、2tを施用し、軽く耕うんを行いましょう。更に、深耕を行うと発根が促進され、肥効率向上にもつながるため計画的に行います。但し、今年、中切り更新をした茶園の深耕は控えましょう。

2 病虫害の防除

秋芽が硬化していない茶園では、連続した降雨等により炭疽病やもち病が多発します。一葉期頃に予防効果の高い薬剤を、三葉期頃に治療効果の高い薬剤を散布します。

なお、秋芽の萌芽期に降雨が多く殺菌剤の散布ができなかった場合は、三葉期頃に予防剤と治療剤を混用して散布すると安定した防除効果が期待できます。

また、網もち病の多発が予想される場合は、四、五葉期に治療効果のある薬剤を追加散布します。

害虫ではチャノミドリヒメヨコバイやチャノキイロアザミウマ、カンザワハダニ等の吸汁性害虫やハマキムシ類の発生が多くなるため、茶園をよく観察し適期防除に努めましょう。

(新 正仙)

◆しいたけ

1 原基づくり

9月から10月は、しいたけのもととなる原基の形成が盛んな時期で、今後のしいたけ発生量に大きく影響します(原基は20度前後で最もよくできます)ので、原基の形成促進のため、光の確保に加え、十分な散水を行うなどほだ木の水分補給に努めましょう。

2 ほだ場の準備

秋以降のほだ起こしに備えて、ほだ場の選定と整理が必要です。ほだ場には、風当たりの少ない暖かい場所（南東斜面）で、ほだ木に直接風が当たらないようにし、排水が良く、適度の湿度が確保でき、日光がチラチラ差し込む林内が適しています。散水のための水源が確保できれば、なお良いです。

スギやヒノキ林のほだ場では、間伐や枝打ちを行い林内を明るくし、光や降雨の入りやすい環境を管理するとともに、風の強い場所では、発生量等にも影響（特に厳冬期）が出ますので、防風垣や防風ネットを設置するなど環境改善に努めましょう。

（奥野 慧）

関連情報

◆秋の農作業安全確認運動

9月1日から10月31日までの2ヶ月間は秋の農作業安全確認運動実施期間です。

全国では、毎年約250名の方が農作業事故で亡くなっており、本県でも令和5年に6名、令和6年に6名の尊い命が失われています。

農作業死亡事故の中でも、農業機械作業による事故が最も多く、農作業死亡事故全体の約6割を占めています。機械に乗るときは、必ずシートベルトやヘルメットを着用しましょう。また、事故が起きた場合に備え、作業はなるべく2人以上で行い、万が一1人で作業する場合は、必ず携帯電話を所持してください。

◆熱中症対策

まだまだ、残暑が続いています。気温の高い日中に農作業を行う際には、単独作業を避けるとともに、ファン付き作業服や冷却ベストなどの熱中症対策アイテムを活用し、身体への負担を減らしましょう。

◆熱中症対策義務化

令和7年6月から、労働者を雇用する農業者や農業法人等、労働者を雇用する全ての事業者に対し、労働者への熱中症対策が義務付けられています。

熱中症のおそれがある作業者を早期に見つけ、その状況に応じ、迅速かつ適切に対処することができるよう、農林水産省が作成しているチラシ等を活用し、重篤化を防止するための「体制整備」、「手順作成」、「関係者への周知」を行いましょう。

◆気象災害対策

台風や大雨等、気象災害が多くなる時期です。宮崎農業気象WEB SERVICE（ウェブサービス）では、様々な気象災害に対する対応策をわかりやすく掲載しています。農作業の参考にしてください。

<http://nogyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp/>

（農業普及技術課）

内容の詳細について

9月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県総合農業試験場及び山村・木材振興課、農業普及技術課が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

（<http://nogyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>）

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
普通期水稻	いもち病(葉) 紋枯病※	やや少 多	上位葉に葉いもちが多く見られる場合、降雨が続くと穂いもちに進展しやすくなります。ほ場の様子を観察し、発生が多い場合には穂ぞろい期の防除を徹底します。 紋枯病は、穂ばらみ期以降、高温多湿条件下では上位葉鞘へ進展しやすいため、発病程度が高いほ場では、農薬使用基準の収穫前日数等に注意して防除します。
	トビイロウンカ (秋ウンカ) 斑点米カメムシ類	やや少 並	トビイロウンカの発生は平年よりやや少ない状況ですが、9月の気温が高いと短期間に増殖することがあるため、ほ場での発生状況に注意します。 斑点米カメムシ類の加害をうけると等級低下につながるため、穂ぞろい期とその7～10日後の2回防除を徹底し、発生が高密度の場合はさらに追加防除を行います。
施設果菜類	ウイルス媒介虫 (アブラムシ類、アザミウマ類、タバコナジラミ類等)	—	アブラムシ類やアザミウマ類、タバコナジラミ類により媒介される種々のウイルス病は、生育初期に感染すると大きな被害をもたらします。媒介虫への対策として、施設開口部への防虫ネットの設置や定植時の薬剤施用など、総合的な防除を徹底します。 MYSVを媒介するミナミキイロアザミウマの防除を徹底します。発病株は伝染源となるため、速やかに抜き取ります。
	キュウリ黄化えそ病(MYSV)	—	
野菜類等	ハスモンヨトウ タバコガ オオタバコガ	やや多 やや多 多	ハスモンヨトウ、タバコガ、オオタバコガの発生が多くなっています。ほ場を定期的に見回り、早期発見と若齢期の防除に努めます。施設栽培では施設開口部に防虫ネットを設置し、施設内への成虫の飛来を防止します。
促成いちご	炭疽病	—	苗からの持ち込みによる発生が見られるため、定植前に防除を徹底します。また、苗床で発病を確認したら、周囲の株(半径3ポット)も感染株と見なして廃棄し、健全苗のみを定植します。
さといも	疫病※	—	台風や降雨の後に発病が広がりやすいため、今後の気象に留意しながら、薬剤による適期防除に努めます。
かんしょ	基腐病	—	発病株の残さは、次年度の伝染源となるため、収穫後の残さをほ場や周辺に残さないようにしましょう。
果樹全般	チャバネカメムシ ツヤカメムシ	並 やや少	県内5箇所に設置した予察灯への誘殺数は、平年並～平年よりやや少ない状況です。果樹カメムシ類は、園外から飛来してくるため、園内外を見回り、早期発見、早期防除に努めます。
カンキツ類	黒点病 かいよう病	並 やや少	黒点病、かいよう病ともに、降雨が続く場合は、雨間を利用して防除適期を逸しないように薬剤散布を実施します。
	ミカンハダニ チャノホソガ カンザワハダニ	多 並	ミカンハダニは、発生初期段階(寄生葉率30%、1葉当たり雌成虫数0.5～1頭)で防除することがポイントです。
茶	炭疽病 輪斑病	やや多 少	炭疽病の発生が多くなっています。秋芽の生育期に降雨が続く場合には、生育初期から7日間隔で2～3回防除します。
	チャノカクモシハキ チャハマキ チャノホソガ カンザワハダニ チャノミドリヒメヨコバイ チャノキイロアザミウマ クシカガラムシ	並 並 やや少 並 やや多 少 並	カンザワハダニは、ほ場を見回り、低密度のうちに防除を行うとともに系統の異なる薬剤をローテーションで使用します。 チャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマは、秋芽の萌芽～1葉期、2～3葉期の2回防除を行います。

- 1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。
- 2) ※は病害虫発生予察情報を発表中です。
- 3) 病害虫防除肥料検査センターのHPアドレスは、QRコードより閲覧してください。

